

# 教育における興味と達成感

田 中 真 一

## 1. 担当授業と受講生の興味

本発表では、大学生の「学力低下」、「学ぶ意識の低下」がしきりに叫ばれる現在の大学教育において、どのように日々の授業を進めていくかということを、自らの授業での実践を踏まえて、報告します。

筆者は昨年度（2002年度）、神戸女学院大学文学部で前後期合わせて、（1）①～⑥の六つの講義を担当しました。それらは内容により、以下のように二分されます。

### （1） 2002年度担当講義

#### a. 基礎研究

現代日本語論 J271ab（日本語音声概説）

受講者①a：87名 ②b：83名

日本語学特講Ⅱ J472ab（日本語音韻論）

受講者③a：37名 ④b：34名

#### b. 応用・実践

日本語教授法Ⅰ ED266（1）（概論）

受講者：⑤49名

日本語教授法Ⅱ ED366（2）（内容論）

受講者：⑥29名

言い換えると、（1a）は日本語の音声構造に関する授業、（1b）は日本語教育に関する授業になります。この（1a）、（1b）の間で、受講生の取り組みと授業評価が若干異なる結果が得られました。それについて、次節で簡単に紹介しようと思います。

## 2. 「基礎研究科目」と「応用・実践科目」における受講生の学習態度

筆者はどのような授業でも、初回にアンケートをとることにしています。それによって、当初に想定していた授業内容を、受講者に合わせて微調整できるからです。2002年度に担当した授業の中から、（1a①）と（1b⑤）における学生の受講理由を比較してみます。講義①と⑤を比較の対象としたのは、それらがおもに2年生を対象に開講されているという点で、共通しているからです（神戸女学院大学では、（1）の授業番号の100の位の数字が、おもな対象学年となっています）。

（2） 授業初日のアンケート：なぜこの授業を受講しようと思いましたか。正直に答えて下さい（分母はアンケートに答えた全体の人数、分子はその回答を選択した人数をそれぞれ表しています）。

(1a) ①：日本語について知りたいと思ったから。 19/81 (複数回答)

：シラバスを見て面白そうだったから。 15

：同一時間帯では一番面白そうだったから。 8

：他に取る授業がなかったから。 8

：日本語教員養成課程の必要単位だから。 7

(1b) ⑤：日本語教師に興味があるから。 12/27 (複数回答)

：外国人に日本語を教えてみたいから。 11

：日本語教育に興味を持っているから。 9

：海外に留学するとき役に立ちそうだから。 5

：国際理解に役立ちそうだから。 3

この結果からうかがえることは、基礎研究に関する授業と日本語教育に関する授業との間に、学習者の興味の持ち方、つまり、初めの動機付けに少なからぬ違いがあるという点です。(1a)の基礎研究系の科目に消極的な動機・興味が目立つのに対し、(1b)の日本語教育に関する科目は積極的で明確な動機・興味が目立っているといえます。このような結果は、二つの科目の性格からある程度予測できることではしょうが、本学総合文化学科が提供する科目の大半が、受講者が初めから明確な動機を持って受講するわけではない(つまり、何となく面白そうだから受講する)ものと思われます。その分、事前シラバスで学生の興味を引きつけること、そして、授業を進めて行く中でそれぞれの専門領域が「こんなに面白いものだったのか」と発見させることが重要であると思います。

次節では、学期の終わりに行われる授業評価アンケートを、(1a, b)の観点から簡単に分析し、その後、授業で行ってきた工夫を紹介したいと思います。

### 3. 「基礎研究科目」と「応用・実践科目」における受講生の評価

神戸女学院大学では、学期末ごとに、開講された全科目に対し学生からの評価アンケートを実施しています。このアンケートは自己評価委員会によって作成されたもので、受講生の授業への取り組み、学習態度、教師の取り組み、授業の有益度、他の学生への推奨度などが質問項目としてあがっています。質問事項それぞれに対し、受講者が1～5(最低が1、最高が5)の5段階で評価する仕組みになっています。

このうち、とくに授業の有益度、推奨度に着目して(1a)と(1b)の科目全体を比較してみます。

(3) 授業後のアンケート(自己評価委員会作成によるもの；1～5ポイント)

a. この授業は役に立ちましたか。 → (1a)：4.1～4.4

(1b)：4.5～4.7

b. この授業を他の学生にも奨めますか。 → (1a) : 4.0~4.4

(1b) : 4.3~4.6

総じて(1b)の「日本語教育」に関する評価の方が、(1a)の「音声基礎研究」に関する評価より若干高くなっているのがわかります。その差は平均で0.4ポイント近くになりました。なお、「教師の授業への取り組み」という項目では、(1a)と(1b)との間にほとんど差が見られませんでした。以上より、受講者の授業への取り組みそして評価は、初めの興味・動機とある程度相関しているということがいえます。どちらの科目群においても、受講開始から終了までの間に、満足感(達成感)を抱いたと言えますが、具体的な値は、初めの興味の度合い(つまり出発点)に比例していると言えそうです。そのような意味においては、(1a, b)どちらの科目においても同様に一定の満足は得られたと判断できますが、ここで二つほど考えなければならない問題があるように思われます。

一つは、あまり積極的な興味を持たずに(1a)の科目を受講した学生に対し、(1b)と同じくらいの満足を得させる努力をすることであり、もう一つは、(1b)に興味をあまり持たない学生に対しても、新たに興味を持つようにするということです。

上記の点を踏まえ、2002年度に筆者が実践した具体的な方法をそれぞれ(1a, b)に則して紹介します。前半(4.1節)で応用・実践科目の、後半(4.2節)で基礎研究科目における取り組みをそれぞれ述べていきます。

## 4. 教育実践

### 4.1. 応用・実践科目(日本語教育)に関する実践

まず、(1b)の日本語教育に関する科目の実践から紹介しましょう。この科目の特徴は、講義であるにもかかわらず、演習・実習の性格を帯びていることです。具体的な実践としては、受講者が教壇で教える姿をビデオで撮影することにより、授業を活性化することを試みました。以下に授業の流れを紹介します。

#### (4) 「日本語教授法Ⅱ」の取り組み

a. 初回に各自好きなように教案作成、実演。e.g. 「あります／います」を教えなさい。



b. 事前講義



c. 各受講者に2, 3の文型を担当させる。



ビデオで撮影



e. 受講者全員で、よかった点・悪かった点を議論。教員のコメント。

↓  
f. 希望者にビデオを配布

↓  
g. レポート

初回の授業で、受講者に、たとえば「初級学習者に対し『あります／います』を教えてみなさい」という課題を出します。すると大半の学生がほぼ例外なく次のように教え出します。

「『います』『あります』は、ともに存在を表します。このうち『います』は生物が主語になったときに使われ、『あります』は非生物が主語の時に使います」。

「います」「あります」という表現がわからない日本語学習者は当然、説明に使われる「存在」「非存在」「表す」「ともに」などの表現はわからないはずなのですが、日本語を母語としてあたり前に使っている受講者はほぼ例外なく、上のような説明を始めます。

このようなことをきっかけにして、日本語には教え方があるという導入を始めます。

つぎに各受講者に2, 3の文型を担当させ、それを他の受講者を前に（じっさいに留学生に教えるつもりで）実演してもらいます。それをビデオに撮り後日、本人に観てもらいレポートを書かせるという手順をとっています。ビデオを撮るということは、少なくとも以下のようなメリットがあります。一つは、受講者が自分の教える姿を見て、客観的にフィードバックができるという点で、もう一つは、受講者の準備や取り組みに真剣さが増すという点があげられます。さらに、本学の目指す少人数教育に合致するというとも言えますし、他の受講生による私語も減少するという副次的な効果も得られます。じっさい、ビデオで撮影される方法に対する受講者の反応はかなり良好でした。

反省点としては、集録したビデオを希望者のみに配布するということをしていましたが、できれば全員に配布して、さらにフィードバックを徹底することがあげられます。そうすることによって、個人個人の目標とその到達度が客観的に示されるからです。これは2003年度からの課題です。

#### 4.2. 基礎研究（音声）科目における実践

つぎに、筆者の専門である音声に関する授業の取り組みを紹介します。先述したように、これらの科目は、日本語教育の科目に比べ、強い興味を持って受講する学生が相対的に多くないと思われます。したがって、その分野がいかに面白いものであるのかをシラバスだけでなく、実際の授業を通して紹介する必要があります。

以下では、人間言語の「母音配置」に関する授業をその一例にとり、授業の進め方を報告していきます。

(5)

a. 授業のアウトライン (授業への質問用紙配布)



b. 身近な言語現象からの問いかけ (A, B, C....)

e.g. A. なぜ、日本語の50音は「あいうえお」という順番なのか。



B. なぜ strike [straik] は日本語で「sUtOraikU」になるのか。

C. なぜタ行はローマ字で、ta, chi, tsu, te, to と表記されるのか。

c. 現象の説明・一般化



d. 理論的説明+補足 (コンピュータによる音響分析)



e. まとめ (質問用紙回収)

(5b) のA~Cは、すべて関連したテーマですが (ここでは、紙面の関係もあり、具体的な内容には詳しく触れません)、上記のような身近な例をもとに、それを導入として、メインである(5c, d)の内容に入っていきます。それには二点ほど理由があります。一つは、経験的に、よほど言語学・音声学を学びたいという強い動機がある学生でないと、(5c, d)から始めるのは難しいと考えるからです。日本語や外国語など言語を専攻する学生にとっては、音声学・音韻論は「言語の構造を知る」さらには、「発音が向上するのではないか」という期待を持たせるという面において強い動機付けとなり得ますが、本学総合文化学科の学生で外国語(もしくは)を専門として入学する学生はシステム上非常に少ないと思われます。このような面からも、「興味」をいかに喚起するかが、大きな要素となります。

もう一つは、近年の学生は抽象度の高いものを、以前の学生に比して好まない傾向にあるということがあげられます。それは、本論集所収の他の論文においても何らかの形で言及されているものと思われます。そのような学生に対しては(それ以外の学生に対しても、面白さの提供という面で)(5b)のプロセスは重要なものであると思われます。

この授業の工夫点としては、ほぼ毎回(出席を兼ねて)質問用紙を配り、授業を聞きながら、その授業に関する(あるいはそれ以外の)身近な現象を書いてもらうことです。それにより、受講者の理解が深まることが期待され、さらには、(5b)の新鮮な例の蓄積にもなるということがあげられます。

(5b)のテーマの大半が、学生にとって興味ある内容であり、そのような意味で好評でしたが、中にはまれに、受講者にとってあまり興味のない言語現象を紹介してしまったこともありました。そのような場合、(5c, d)に進むのが非常に辛かったというのが正直な感想です。多くの受講者にとってさらに面白い、かつ、さらに新鮮なテーマを探していくことも今後の課題です。もちろん、筆者自身が、本論である(5c, d)の研究に、さらに精進を重ねることは言うまでもありません。

## 5. まとめと課題

本発表では、年々「学力低下」が指摘される大学教育のなかで、いかにして受講者の興味を喚起し、効果的な授業を行うかについて、自らの実践を含めて論じました。確かに、強い動機をもって受講された方が、やりやすい面もありますが、授業を通して動機を提供することも教育の大きな役目であると思います。受講者にとって、さらに発見に満ちた面白い授業を提供することがこれからの目標です。

(原稿受理 2003年4月10日)